

アレクサンドリアのクレメンス 『救われる富者とは誰であるか』のテキストをめぐる注記 (スルス・クレティエンヌ版準拠)

秋 山 学

序.

筆者の拙訳になるアレクサンドリアのクレメンス (A.D. 150-215) による著作『救われる富者とは誰であるか』(ラテン語名 *Quis Dives Salvetur?*; 略題 QDS) は、上智大学中世思想研究所編訳／監修の下、まず平凡社刊『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』の 417-466 頁に「アレクサンドレイアのクレメンス『救われる富者は誰か』」として収録され、初版が 1995 年 2 月に刊行された(秋山 1995)。この作品はその後、平凡社ライブラリーの No. 874『中世思想原典集成 精選 1』(2018 年 11 月刊)に同書名の拙訳で再録されている(「アレクサンドレイアの」という表記、「救われる富者は誰か」という訳題が本稿とは異なる)。

平凡社からの公刊後、教文館刊『キリスト教教父著作集』(荒井献・水垣渉監修)の中に、アレクサンドリアのクレメンスによる全著作が拙訳により収められる予定となり、その編集作業が始まった。このプランに基づき、まずクレメンスの主著『ストロマティス』の第 1～第 4 巻および第 5～第 8 巻を収録したものが、それぞれ『ストロマティス』[「綴織」] I および II として 2018 年(1 月および 5 月)に刊行された(同シリーズの第 4 / I 巻, 第 4 / II 巻)。次いで同シリーズ第 5 巻として、クレメンスによる他の著作、すなわち『プロトレプティコス』(「ギリシア人への勧告」, 全 1 巻), 『パイダゴゴス』(「訓導者」, 全 3 巻), この『救われる富者とは誰であるか』, および他の小品・断片を収録したものが刊行される予定である(2019 年 6 月末現在)。

教文館版のプランが明らかにされた当初より、『救われる富者とは誰であるか』に関しては、平凡社と教文館の双方から拙訳が公刊される予定となったため、版權その他の問題を解決する目的で、筆者は平凡社版の拙訳に修正を施し、あらたに本学の紀要論文のかたちで「アレクサンドリアのクレメンス『救

われる富者とは誰であるか』全訳【改訂版】』を起稿した(秋山 2015)。しかしながらこの際の改訂は、訳文の見直しという作業に終始するものであり、底本とするテキストの変更というレベルに至るものではなかった。

ところで2011年にフランスのセルフ社より、『スルス・クレティエンヌ』叢書(略称SC)の第537巻として、新たなQDSの校訂版が刊行された(Nardi-Descourtieux 2011)。筆者が平凡社版および筑波大学の紀要に拙訳を発表した際には、『ギリシア・キリスト教著作家集成』(略称GCS)中のオットー・シュテーリン校訂になるテキスト(Stählin 1980)を底本としたのであるが、この『スルス・クレティエンヌ』版には、シュテーリン版とは少なからぬ箇所において異同が認められた。そこで筆者は、まだ公刊されていない教文館版の訳稿を準備するに当たり、あらためて著作権その他の困難な問題が生じるのを避ける意味で、このSC版を底本とすることを考えるに至った。これを機に企画されたのが本稿であり、教文館版のための訳稿を準備しつつ、シュテーリン版とSC版とでテキストが異なる箇所を順次明記し、そこに認められる両者の考えの相違点その他を注記することにしたものである。なお訳文そのものは、前回紀要に寄稿したものと、結果的には9割以上が同文となることからこれを見合わせ、今回は注記事項のみを公にして、SC版に基づく拙訳文は教文館版の刊行時に公表することとした。したがって以下の注記を読んでくださる際、必要に応じて随時、『文藝言語研究 文藝篇』に掲載された拙訳(「旧稿」; 秋山 2015)、ないし平凡社版の拙訳(秋山 1995)をご参照いただければ便宜であろう。

ただ、紀要に旧稿を掲載した当時は、シュテーリンの版本を底本に定め、平凡社版の改訂版を掲載するとはしたものの、全訳の完成を優先させ急いだため、細目に及ぶ配慮に関しては不十分であった。この点については現時点で率直に認めたい。したがって、数年前にひとまず仕上げた訳文のうちに、下記の注記をめぐる事項がすべて反映されているとは限らず(すなわちシュテーリン版テキストへの忠実さが首尾一貫されているとは限らず)、また現在から見て旧稿に手を加えたい点(すなわちシュテーリン版を底本とするという姿勢を徹底させたい点)が明らかになっても、下記の注記において、その旨を一々断ることはしていない。翻訳とは結局のところ近似値を提示する以外にない性格のものであり、また日本語訳が公表される際に、底本への忠実さを貫きそこからの乖離を一々注記すれば、かえって煩瑣に陥りかねないと考えたからでもある。訳文をご参照下さるとすれば、それは各章節における文意の流れを掴んで

いただくというだけの意味を持つ、と理解されたい。

以下、Stとあるのはシュテーリン版の読みを、一方Sとあるのは11-12世紀に遡る手写本スコリアレンシスΩ III 19, f. 326v-345のテキストを指す。記述の都合上、Stを先に挙げたが、Sの項に（＝SC）とある場合、それはシュテーリンが原写本テキストに修正を施したものと理解されたい。Sは、この『救われる富者』に関して最良の古写本であり、他には16世紀のV写本（ヴェティカヌス・グラエクス 623, f. 238-255v）を擁するのみである。シュテーリンの読みは要するに、この古写本Sのテキストに対し、先駆の古典学者たちの提唱になる修正読みを容れた場合を含め、自らの提示するテキストを掲げてSから離れた場合ということになる。稀にはあるが、SとVとが異なる場合にシュテーリンがV写本の読みを採っているケースもある（22.）。新しいスルス・クレティエンヌ版のテキストがシュテーリン版と異なる場合とは、ほとんどの場合、SCがこのシュテーリンらの提唱に批判を加え、Sのテキストに戻すことを主張したケースである。SCがシュテーリンの修正読みを採用している場合、以下の注記の対象とはしていない。

SC（ナルディ・デスクルティウ）版とGCS（シュテーリン）版の相違は、下記のように総計70箇所のにぼる。このうち、SC版がS写本のままのテキストを採用し、シュテーリンの提唱する読みを採らなかった箇所が、7, 24, 70.を除き計67箇所を数える。24.についても、これはSCがもう一つの写本Vの読みを採用した箇所である。なお各冒頭の章節行数表示はSCによる。

StとSC両者の相違の背景には、クレメンスの措辞・文法の用法に関して、クレメンスが写本で時に見せる（かに思われる）「非正統性」に対し、どこまで寛容でありうるか、という問題に対する態度の差が存在する（たとえば34.を参照）。総じてSCには、文法的にであれ神学的にであれ、「原写本の本文で文意が取れる限り、その原写本のテキストを保持する」という原則に基づく編纂方針が顕著である。ここには、写本という「モノ」のレベルを最大限に尊重しようとする、フランスに固有の文献学的伝統を見出すことができるだろうか。

本文

1) 1,2,7

St το<υτου> το S το*** το γερας（＝SC）

テキストに関して崩れている写本に対して、シュテーリンは1861年にラ

イブツィヒから版本を公刊したヴィルヘルム・ブルーノ・リンドナーの提唱した読みに従い、「この方の」すなわち「神の」賜物、と読む。しかしSCは崩れた状態のテキストをそのまま放置して載せるのみで、解決策を提示してはいない。ただ「神の」という補いが適確であるかどうかは問題であり、「賜物」の意がここに読み取れば十分であるとしてSCの方針もうなずける。

2) 1,4,27

St λόγῳ S λέγω (=SC)

「わたしが言うのは」と定動詞（一定の人称・数による行為であることを明らかにし、主語を明示する動詞活用形；ここでは1人称単数形）を表示する写本に対し、シュテーリンは、ユトレヒトで1816年に本作品の版本を出版したカロルス・セガールの提唱した読みに従い、「救い主の恵みにより、言葉を通して」と解する。写本のテキストで意味が取れないわけではないため、そのようなケースには写本のテキストを保持しようとするSCの方針が明らかである。

3) 1,4,30

St μόνος τὸ S μόνος οὗτος (=SC)

「この方のみが」と解し、代名詞の男性主格形をここに読む写本に対し、シュテーリンは、「永遠の生命の報償」の「報償」にかかる定冠詞中性形をここに読む。これはシュテーリンの提唱になる読みである。

4) 1,5,32

St λιπαροῦς S λιπαρᾶς (=SC)

シュテーリンは、パーシー・モルドーン・バーナードが1897年にケンブリッジで出版した版本での提唱に基づき λιπαροῦς と読み、「忍耐強き靈魂」とする。写本では λιπαρός（輝かしい）の女性形を読んでいるため「輝かしき靈魂」となる。写本のままの文意で何ら不都合を感じない。

5) 1,5,33

St πολιτείαの前に ἡを加える。 S (=SC)

この箇所についても、シュテーリンはバーナードの提唱に基づき、「生き方」の前に定冠詞女性主格形を加える。この定冠詞は写本には存在せず、なくとも文意には影響しないだろうというのがSCの意向であり、筆者もこれに賛同する。

6) 2,2,12

St ἐν ἀνθρώποις S ἐν ἀνθρώπῳ ἡ (=SC)

「人間のうちにあって、不可能なことがあるいは可能となって」と読む写本

に対し、シュテーリンは、やはりバーナードの提唱に基づき、「あるいは」の部分に相当するスペース 3 文字分を、「人間」を複数形にし「人間たち」とすることで埋め、解決を図ろうとする。ただ写本のままであっても、クレメンスの神学は十分に感じ取ることができる。

7) 2,4,16

St περι S ὑπερ ἐπὶ SC ἐπὶ

この一節に関して、SCは、ミケーレ・ギスリエリが1623年、リヨンで出版した版本の読みἐπὶを採用している。写本のままのテキストはὑπερ ἐπὶと読んでおり、これだとὑπερは関係代名詞ということになって構文上うまく当てはまらない。シュテーリンのようにπεριと読むか、ギスリエリのようにἐπὶと読むかの問題であるが、写本にはἐπὶが記されているのであるから、これを活かそうとするSCの方針は理解できる。

8) 2,4,16

St πλουσίωνの後にτῶνを加える。 S (=SC)

シュテーリンの読みは、シュテーリン自身のテキストにおいて、エドゥアルド・シュヴァルツの提唱として挙げられたものである。シュヴァルツには、1903年『ヘルメス』誌に掲載された論文（"Zu Clemens «Τίς ὁ σφζόμενος πλούσιος»", *Hermes* 38, 77-83）もあり、そちらに載る説かどうかについては確認できていない（本稿では以下同様）。この見解は、「富める者たち」に、関係代名詞風の定冠詞（複数属格形）を付す修正読みを施すものである。写本のまま、定冠詞抜きでもその意味にとれないわけではないと筆者は考えるため、SCの方針を多としたい。

9) 3,1,4

St κενὴν S καινὴν (=SC)

シュテーリンの読みは、1672年にパリで版本を刊行したコンペフィスの提唱に従うものである。写本は「新しい」と読むのに対し、シュテーリンらは「虚しい」という形容詞の読みを入れ、対立する。必ずしも「虚しき絶望」と修正せずとも、「新たな絶望」と理解しうるとするSCの解釈については、SC版106頁の脚注に詳しい。

10) 3,3,15

St ἐαυτοῦ S ἐαυτῷ (=SC)

1897年ケンブリッジにて刊行されたパーシー・モルドント・バーナードの版本（上記4. 参照）を評し、1898年の*The Classical Review*誌に掲載された

ジョゼフ・ビカーステット・メイヤーの見解 (《Barnard's Edition of Clement of Alexandria *Quis Dives Salvetur*», *The Classical Review* 12, 45-48, 1898) に従って、シュテーリンは「おのれの場合にひきつけて」と属格に読む。だが写本は与格形になっており、その前の前置詞 ἐπὶ とのつながり具合から言えば、与格形を採る SC のほうが自然かと思われる。

11) 3,4,19

St γυμνάσια καὶ τροφάς S τροφάς καὶ γυμνάσια (= SC)

シュテーリンは、シュヴァルツにより提唱された説に従っている。これは名詞の並ぶ順序に関しての異なりであり、SC は写本のままの読みに戻したということになる。

12) 3,6,30

St γνώσεις S γνώσεις (= SC)

写本では複数形になっており、それをシュテーリンが単数形にした。後続の ἀληθείας について両者は異ならない。それに先立つ名詞 3 ケが「愛」「信仰」「希望」といずれも単数形になっていて、シュテーリンの主張も理解できるが、必要以上の改変は行わないという SC の主張もうなずける。

13) 3,6,31

St ὅταν の後に ἡ を加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツによる提唱に従ったものである。この提唱は要するに「最後のラッパ」に定冠詞を付すべきだとする主張に帰結する。S は必要以上の改変を行わないという方針をここでも維持している。

14) 4,6,18

St ἐφύλαξα の後に ἐκ νεότητός μου を加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、セガールの提唱に発するものである (上記 2. 参照)。『マルコ福音書』では同 10,20 にこの句「わたしの若いころから」が加わっている。クレメンスのテキストにおいてもこの付加句があったほうが文脈にアクセントが加わって効果的であるというのがシュテーリンの考えであろう。ただ SC はこのような場合、クレメンス自身の写本テキストの読みを優先させるという古典学の基本方針を貫く (後続 57. をも参照)。筆者もこれに賛意を表したい。

15) 4,10,36

St λέγει を削除。 S λέγει (= SC)

原写本では「イエスが答えて言うには」の「言う」が記されているのに対し、

シュテーリンは、バーナードが1897年にケンブリッジで出版した版本（上記4. 参照）での提唱に基づき削除している。典拠は『マルコ福音書』に遡るわけであるが、福音書原文では単に「イエスは言った」（ἔφη ὁ Ἰησοῦς）となっただけであり、クレメンスの写本に見られる「答えて」（Ἀποκριθεὶς）という分詞形も見当たらない。シュテーリンのテキストでは定動詞形がないが写本には見られるため、SCではこれを残して明示し、文章を明確にしていると言える。

16) 5,1,2

St <τοῖς> ἀνωμολογημένοις S ἄν ὁμολογημένοις (= SC)

写本のままのテキストを残すのがSCである。シュテーリンの読みは、ヴィラモヴィッツ・メレンドルフに遡る。写本ではὁμολογεῖν「同意・一致する」の現在完了中動相の分詞・中性複数与格形と取り、これに小辞ἄνを併せて読むところであるが、シュテーリンは、接頭辞ἀνάを接着させた複合動詞のἀνομολογεῖνを想定し、定冠詞の複数中性与格形を前に補う修正読みを提唱したヴィラモヴィッツに従っている。SC・シュテーリンとも文意に大差はなく、写本でははっきりしない面を、定冠詞を補ったヴィラモヴィッツ・シュテーリンが明確にした箇所である。ここの、写本で読みうる限りそのテキストを残そうとするSCの方針が明確である。

17) 5,3,11

St ἥττονοςの後のἐτι καὶ νῦνを削除する。 S (= SC)

この箇所についても、写本のテキストそのままを残すSCに対して、シュテーリンはギスリエリが提唱した読み（上記7. 参照）に従い、ἥττονοςの後のἐτι καὶ νῦνを削除する。「一層」という意味のἐτι καὶ νῦνは、「強調」といった意味のἐπίτασιςとあいまって「一層の強調」といった意味になり、SCの主張は共感できるものである。

18) 7,1,5

St θεόνの後にὄνを加える。 S (= SC)

シュテーリンはここでも、ヴィラモヴィッツの読みに従っている。ヴィラモヴィッツは「神であるのだから」といった意味合いを、be動詞の分詞形ὄνをここに付記することで含ませようと考えたものと思われるが、SCは必要以上の改変を行っていない。

19) 8,1,7

St ὑπὸの後のτοῦを削除する。 S (= SC)

定冠詞のτοῦを外して読むシュテーリンの提唱は、彼が初めて行ったもので

ある。「真正な子」という表現に関して、これに定冠詞を付すとすればイエスを指すものと思われ、そのテキストを提示する写本と、それを容れるSCの方針が理解できるため、シュテーリンの方針にはいま一つ合点が行かない。

20) 8,3,18

St παρέσχηται S παράσχηται (=SC)

シュテーリンの読みは、1897年に公刊されたバーナードの版本（上記4.参照）の中で記憶されているヘンリー・ジャクソンによる提唱である。写本のテキスト、シュテーリンの読み、両者ともに動詞παρέχειν「提供する・呈する」の3人称単数活用形を載せるが、前者はアオリスト接続法中動相、後者は現在完了接続法中動相である。この場合は接続法であり、時称の観念が関わることはない。したがって単にアスペクト（動作態）のみの相違において、アオリスト（瞬時相・一回限りにおける動作の把握）と現在完了（現在にまで継続する結果）の使い分けをここに読むか否か、ということになる。シュテーリンの読みはこの箇所、写本のアオリスト形を訂正して現在完了形を提示するわけであるが、そこまでの意味の機微を見出すことは、筆者には不可能であった。写本のテキストを尊重するSCを採りたい。

21) 8,3,20

St πολίος S πολióτερος (=SC)

「思慮に関してより長じている」（原意は「白髪である」の意）というふうに、比較級を読む写本に対し、シュテーリンは単に原級を読むべく修正する。これはシュテーリン自身の発案である。この箇所に関しても、写本にさしたる困難がなければ写本のテキストを保存する、という方針を貫くSCの主張に無理を見出すことはできない。

22) 8,4,22

St ὅλως (=V) S ὅλης (=SC)

シュテーリンはV写本に採られているテキストを採用し、S写本から離れる。このシュテーリンの読みであれば、「生涯すべてを必要とする」といった意となる。これに対してS写本のテキストであれば、「生命をことごとく必要とする」といった意味になるだろう。V写本のほうにクレメンスの原筆が保存されているとは敢えて考えない、というのがSCの主張であり、筆者もその方向性を多としたい。

23) 11,2,6

St δόγματαの後に τὰ を加える。 S (=SC)

シュテーリンはδόγματαの後にτὰを加えるが、これはバーナードが1897年にケンブリッジで出版した版本（上記4. 参照）での提唱に基づいたものである。この付記されたτὰは、ほとんど関係代名詞と同一の働きをなし、後続の「靈魂の財をめぐる教説」というふうに、教説の内容を明確化する働きを持つことになろう。ただ写本のままのテキストでも、このように文意を把握することは不可能ではない。

24) 12,1,2

St ζωοποιῶν S ζωοποιῶν V ζωοποιόν (= SC)

写本はζωοποιῶνとしていて、これは動詞ζωοποιεῖν「生命を施す」の分詞・男性単数主格形であり、「この一節」が主語でそれに懸かるとすれば中性形であるはずのこのくだりには合致しない。そこでシュテーリンは同じく分詞形・中性単数主格のζωοποιῶνに修正したが、別の写本Vは形容詞ζωοποιόςを考え、その中性形のζωοποιόνを読んでいる。SCはこちらを採用している。意味上はシュテーリン・SCとも大差ない。なおSCがV写本のテキストを採用した箇所はこの一か所に限られる。

25) 13,1,3

St καταλείποτο S καταλείπεται (= SC)

希求法に修正したギスリエリ（上記7. 参照）に従ってここを「反実仮想構文」と推定したシュテーリンに対し、SCは写本のままの直説法による帰結文のあり方を採っている。条件節の方は変わらず希求法であるから、SCにおける帰結としては「どのような共同体が遺されることになるだろうか」という、純粋な疑問文が了解されている。これに対してシュテーリンらの理解は「どのような共同体が遺されるというのだろうか」と、この帰結文にも反実仮想性を含意させている。

26) 14,2,7

St ἀπουσίας S ἀπουσίας (= SC)

セガールの読み（上記2. 参照）に従い、ここにἀπουσίας「野卑さ」を読むシュテーリンに対し、SCは写本どおりにἀπουσίας「非存在」を読んでいる。道具が技量を欠くとき、原因を喪失するために非存在となる、という原文ならびにSCの理解には、大いに共鳴できるものがある。

27) 14,4,14

St αὐτόの後にτοῦτο αἴτιον ὄνを加える。 S (= SC)

αὐτόの後にτοῦτο αἴτιον ὄνを加えるという提唱を行うシュテーリンに対し、

SCは写本どおりのテキストを提示する。シュテーリンの読みは明らかに写本の本文そのものからは逸脱した措辞となっていて、写本を重んずる立場（SC）と、原文の敷衍的説明を要するとみる立場（シュテーリン）とが対立する場面である。

28) 14,5,19

St κτήμασι SI κτίσμασι (= SC)

S写本の原本(SI)はκτίσμασι「基礎・被造物」をここに読むが、シュテーリンはκτήμασι「財産」を読む。S写本には、後代の手でκτήμασιというテキストが掲げられているが、これは無理な綴りであり、η字が写本筆写時、すでに（現代ギリシア語のように）「イ」音へと移行していたことを裏づける証左となるだろうか。つまりこの後代の手は、「イ」と読みながらη字を記したということになろう。この後代の手を誤りを修正するために、シュテーリンの方向に赴くのか、Sの原本に戻すのか、という二者択一になり、そこには文意の理解が関与する。「被造物を美しく用いる」というSCの理解は十分に説得性を持つ。

29) 15,1,4

St πρότερον S πρότερον (= SC)

「まずもって」という写本テキストに対し、シュテーリンは、1672年にパリで版本を公刊したコンベフィスの提唱に従い「むしろ」の意のπρότερονをここに読む。文脈の理解が関与するわけであるが、「財産を放棄しつつなお財産が有用な」状態と、「財産を放棄してなお情動が留まっている」状態の間に、時間の差違を求めるのか（πρότερον、写本）、単に二者択一の関係を読むのか（πρότερον、シュテーリン）という選択肢間の決断となる。写本及びSCでは、まず前者の状況を求めるのがクレメンスの真意であろう、と推測していることになり、これは説得性を有する。

30) 15,2,9

St αὐτῆς S αὐτῆς (= SC)

（状況が）「その状況自身のもの」（を活性化させる）と読む提唱を行うシュテーリンと、（状況が）「その状況のもの」（を活性化させる）と読む写本の違いであり、特に写本から乖離する必要は認められないように思われる。

31) 16,3,9

St δωρεᾶςの後のκαὶを削除する。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツの提唱になるものであり、δωρεᾶςの

後の *καὶ* を削除するというものである。この後に (*καὶ*) *τῷ τε διδόντι θεῷ λειτουργῶν ἀπ' αὐτῶν* という句があり、その中に *τε* があるため、もしシュテーリンらの読みを容れるなら、「財産すなわち黄金や銀、住居を、神からの賜物として有し、その与え主である神に、その財貨を通じて仕え」云々、という文意となる。写本のままであれば、この一節の「有し」の後に「つつ」を補うことになる、といった程度しか両者の間に意味の相違は生じない。SC は写本の読みでも無理はない、と判断したものであろう。

32) 16,3,12

St *δοῦλος* の後に *ὧν* を加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、メイヤーの見解（上記 10. 参照）に従ったものである。この一節には、*μὴ... μὴδὲ... μὴδὲ...* 「～でも～でも～でもなく…」といった否定句が繰り返されていて、*μὴδὲ... μὴδὲ...* の部分には、写本の段階で現在分詞形が認められる (*μὴδὲ ... περιφέρων... μὴδὲ ... ὀρίζων καὶ περιγράφων ...*)。ところが写本では、最初の *μὴ* に続く部分に現在分詞形が見当たらない。ただここには *ὧν κέκεται* という句があり、シュテーリンらの主張の背景には、おそらくこの *ὧν*（先行詞を含む関係代名詞・中性複数属格形）があるために、その直前にあったはずの *be* 動詞の現在分詞・男性単数主格形に相当する *ὧν* が誤って写し漏らされた、との判断が働いているものと思われる。ただ、*ὧν* の見られない写本の文構造であっても、「(獲得した財産の) 奴隷ではないし…」という文意は表され得るため、*ὧν* が不可欠というわけではない。活かせる限り、写本のテキストのままを保持しようという SC の意向がここにも明らかである。

33) 18,6,22

St *αὐτῇ* S *αὐτῇ* (= SC)

シュテーリンによる読みはシュテーリン自身による提唱である。写本の読みの代名詞 *αὐτῇ* は「靈魂」を指す。シュテーリンの読みによるなら「その靈魂それ自体が貧困に陥るとき」といった意味になるだろうか。必ずしもこの箇所在校訂者の蘊蓄を傾ける必要はないように思える。

34) 18,6,25

St *διαφθείρηται* S *διαφθείρει* (= SC)

シュテーリンの読みは、セガールの提唱（上記 2. 参照）に従ったものである。動詞 *διαφθείρειν* に関しては、「腐敗させる・墮落させる」という他動詞での意味用法が一般的である。ただし完了形では「腐敗する・墮落する」という自動詞での意味用法も見られ、あるいはギリシア語旧約聖書（70 人訳）では

アオリスト時称での自動詞の用例が認められる（『士師記』2,19）。この一節についても、自動詞での用法で「ある靈魂は、富ゆえに腐敗していても、その原因となるものに関して貧しくなるならば、救われる」と読むことができる。シュテーリンらの読みは、自動詞での用法を認めず、この場合「腐敗させられていても」と受動にすべきだとの主張に裏づけられたものであり、クレメンスの時代的・地域的な文法用法の非正統性が現れる可能性のある箇所について、それにどこまで寛容になれるかが明らかになる場面だとも言える。

35) 19,1,1

St καλῶςの後に πλούσιοςを加える。 S (=SC)

シュテーリンの読みは、パウル・ヴェントラントが1896年、*Berliner philologischen Wochenschrift*誌の第16号第392欄に掲載した論考での所見を承けたものである。この一文の定動詞はbe動詞に相当する ἐστινであり、主語が「徳において富んでおり、あらゆる運勢を、敬虔にまた信篤く用いることのできる者」で ἐστινの後に続き、述語は意味上、ἐστινの前に置かれている「真にまた美しく富める者」だと理解できる。ただその際、述語の中に「富める」という語は見当たらず、これを補うべきだと判断したのがヴェントラントおよびそれに従ったシュテーリンである。もっとも写本のままの文章でも、意味上「富める」に相当する πλούσιοςは明示されずとも了解され得る、と解すれば写本のテキストは許されよう。SCはこの解釈を採ったものである。

36) 19,1,4

St εἰςの後に τὴνを加える。 S (=SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの提唱（上記7. 参照）に従ったものである。「(彼は) 生命を外的な獲得物へと転化させた者であり」といった文意にあって、「外的な獲得物」という表現に定冠詞を付すか否か、という問題であり、写本に定冠詞は付されていない。特に定まった概念ではないとして、定冠詞を付していない写本のままのテキストを保持しようとするSCの理解はうなずける。

37) 19,3,9

St κόσμονの後に οὐを加える。 S (=SC)

シュテーリンの読みは、アドルフ・ユーリッヒャーが、*Theologischer Literatur Zeitung*誌の第19号（1894年）、第18欄から第20欄において、K. ケスターの著書の書評を行った際に提唱した案を継承したものである。この説はユーリッヒャーの後、ウルリッヒ・ヴィツェルトが1959年にZNTW誌の第

50号（1959年）、123～132頁に“Bemerkungen zu Clemens von Alexandrien (Quis dives salvetur 19 und 42)”と題する論考を発表した際に賛同を得ており、シュテーリンは彼らの説を受け継いだということになる。なおセガール（上記2. 参照）、ヴィッケルト、シュテーリンらは後続の一節に関して、写本テキストではπνεῦμα（「霊」）の後に否定辞οὐがあるのに対し、これを削除する（後続の38）。すなわち、否定辞が2度にわたって関わる箇所があるのに対し、そのどちらの否定辞が不要か、という点が問題となっているのである。写本では前者について否定辞が不要、後者では必要、と判断するのにに対し、シュテーリンらは前者について必要、後者では不要、と判断するわけである。

この一節のテキスト校訂には、πτωχός「貧しい」という形容詞に対する理解が大きく関わる。写本のままのテキストをSCの意向に従って訳出するなら「ただ世だけを頼りとし（πτωχός）情動において富むこの若者に対し、霊において貧しからず（οὐ πτωχός）、神の目に富める方（＝イエス）が語る」となる。πτωχός「貧しい」という形容詞は、『マタイ福音書』5,3「霊において貧しい者は幸いである」という「山上の垂訓」の冒頭部、「貧しい」に用いられているのであるが、この福音書の一節の意味は「ただ神だけを頼りとする」という意味である。「貧しい」にはこのように「ただ～のみを頼みとする」という意味がある一方、「貧しい」という意味があり、クレメンスのこの一節では、前半部と後半部で、同一の語彙πτωχόςが用いられながら、その意味が二様に使い分けられていると考えられ得る。実際、シュテーリンらの修正に従うなら、「世にあって貧しくなく、情動において富むこの若者に対し、ただ霊だけを頼みとし、神において富む方（＝イエス）が語る」となるが、この理解にあっては、前半部と後半部はπτωχόςに関して二様の意味の掛け言葉となっていることになる。筆者の判断では、原文テキストのうちに、十分に深い神学的理解が認められるのは確かであり、原文テキストに敢えて手を加える必要は感じられず、SCのテキストを多としたい。

38) 19,3,10

St πνεῦμαの後のοὐを削除する。 S (= SC)

上掲の37. に関する説明のなかで、併せて詳説を終えた。

39) 19,3,11

St ἀπόστηθιの後にφησίを加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの読み（上記7. 参照）に従ったものである。この『救われる富者とは誰であるか』全体が、『マルコ福音書』第10章

21 節に見られる、イエスの「富める若者」への返答に対する釈義となっているわけであるが、この第 19 章 3 節から 6 節にかけては、福音書におけるイエスの言動をクレメンスがパラフレーズして記す、という体裁となっている。そのような部分に対し、「(イエスは、答えて) 言った」の「言った」という意味を表す動詞 φησί が必要か否か、というのがこの箇所をめぐる見解の相違である。写本に存在しないものは敢えて付加しない、という SC の方針が顕著である。

40) 20,4,20

St ἀσαφῶς S σαφῶς (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの版本における読み（上記 7. 参照）に従ったものである。写本のままのテキストであれば、「彼らは弟子たちとして、主によって比喩的にまた明瞭に語られた事柄を耳にし、師の言葉の深みに気づいた」といった文意になる。ここで、比喩的に語られたその内容の真意が、弟子たちに知り得るものではなかった、と理解するなら、シュテーリンらによる「不明瞭に語られた」との修正が必要となるだろう。ただこれでは、主すなわちイエスの語り方そのものが不明瞭であった、との謗りが含まれかねないとして、写本の「明瞭に」を「きっぱりと」といった意味だと解すれば、写本のテキストでも無理はない、とするのが SC の理解なのであろう。

41) 20,5,24

St ἀποτεθειμένοις S ἀποτιθεμένοις (= SC)

シュテーリンは、メイヤーの見解（上記 10. 参照）に従い、動詞 ἀποτίθημι の現在完了時称・受動分詞を読む。写本は同じ動詞の現在時称・受動分詞である。「情動をいまだ完全には滅却しきれていない自らを自覚し」という意味に関して両者は相違なきものの、これを現在完了で表現するのか、現在で表現するのか、そのどちらがクレメンス自身の感覚に迫り得ているのかを判断することは、現在の筆者にはまだ不可能である。現時点では写本のテキストを保持したい。

42) 20,6,29

St πάντως S παντός (= SC)

「まったくもって」と副詞に修正して読むシュテーリンの読みはヴィラモヴィッツに遡る。写本は「まったく恐れ」と形容詞にして「恐れ」を修飾させる。写本の読み方は不可能ではない、というのが SC の考えである。

43) 21,1,4

St ἀπάθειαν の後に ὁ を加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、ヴィラモヴィッツ・メレンドルフに遡る。写本のままでも、「独力で修練し、無情動を目指して尽力する人間」と読めるが、シュテーリンらは、この場面に登場する「富める若者」を指して「この人間」と特定することが必要だと推測し、そのためには定冠詞が不可欠であろう、と主張していることになる。しかしながら、このレベルでの措辞の問題について、クレメンスは必ずしも極めて厳格であったとは伝えられていないため、ここでも「写本の読みを最大限尊重する」というSCの方針が貫かれたものと思われる。

44) 21,3,10

St μόνη S μόνον (=SC)

シュテーリンの読みは、ライプツィヒで1899年に公刊されたカール・ホルによる『「聖なる並行箇所」からのニケア公会議以前の教父たちの断片集』に基づくものである（Holl 1899）。『聖なる並行箇所』（Sacra Parallela）とは、ギリシア教父たちの著作から、倫理学・道徳学・修道論の教育の際に用いられる典拠を集めた撰文集であり、ダマスコのヨハネが編者として伝えられている。アレクサンドリアのクレメンスは、ホルによるこの著書の85頁から127頁に断片番号184番から342番として掲載され、『救われる富者とは誰であるか』からの引用は、同書112頁（285番）から117頁（297番）に挙げられている。そのうち291番（114頁）が『救われる富者』第21章の当該の箇所からの引用に相当し、確かに291・3）として挙がる引用から、この箇所がμόνηとなっているということが判明する。μόνηと読むのであれば「これが唯一、美しい暴力であり」となって「美しい暴力」を形容する形容詞であるが、クレメンスの写本通りにμόνονと読むのであれば副詞となって「これだけが美しい暴力であり」との意である。どちらでも文意に大差はなく、この箇所に関しても、可能な限り写本のテキストを保持しようとするSCの方針が顕著である。

45) 21,5,21

St ἵσωςの後にτὸを加える。 S (=SC)

シュテーリンの読みは、セガールの提唱（上記2. 参照）に従ったものである。写本テキストでは、ἵσωςの後にτοῦ λόγουとあるが、ここでのλόγοςとは「諺」といった意味であり、「おそらく、諺に言う4オボロス」（を放棄した）、という文意となろう。例えばアリストファネス『福の神』125行や、ルキアノス『ティモン』12などには、「ごくわずかな持ち金」といった意味で「4オボロス」という言い方が用いられる用例があり、特にこの諺を指し、特定したい場合には、「あの諺に言う」といったニュアンスで定冠詞中性形τὸをかぶせることは

可能である。ただここでも、「諺」の意味の λόγος にはすでに定冠詞が付されていて、それが属格で表されているのであるから、シュテーリンらのような修正は必ずしも必要がないと考えられるだろう。

46) 21,6,24

St ἄρτι S ἄχρι (=SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツによる提唱であり、シュテーリン自身の版の中で言及されているものである。写本のままの読みであれば ἄχρι νῦν で「今までに（われわれが述べていることであるが）」の意となる一方、ἄρτι と修正するなら「ちょうど今…」となる。修正読みのほうが意味を明確にし得るものの、さりとて写本の読みを修正するには当たらない、というのがSCの主張であろう。

47) 21,7,27

St τοῦτο S οὕτως (=SC)

シュテーリンの読みは、ヴィラモヴィッツ・メレンドルフに遡る。この修正に従うなら、「真に救い主に随うという、このことは」といった文意となるのに対し、写本のままのテキストであれば「このように真に救い主に随うということとは」という意味で、写本のままでも文意が取れないわけではない。シュテーリンによる修正の背景には、ヴィラモヴィッツ以来のドイツ文献学の伝承を維持しようとする意向があったのだろうか。そこまでのこだわりを感じない筆者としては、写本のテキストを重んじるSCの方針を容れたい。

48) 22,5,17

St ἀγαπῶν S ἀγαπῶν (=SC)

シュテーリンの読みは、シュテーリン自身の提唱になるものである。ἀγαπῶν は、動詞 ἀγαπᾶν 「愛する」の現在希求法能動相・3人称単数形であるのに対して、写本のままのテキストは、同じく ἀγαπᾶν の現在分詞・男性単数主格形を提示している。シュテーリンは併せて、後続の ἐχθρον 「敵」の前に καὶ (“and”, “also” の意)を補うという修正付加を行っているが、この付加に関してはSCも受け入れている。ただこの καὶ の意味付けが両者で異なっているように思われる。シュテーリンの修正に従って文意を取るなら「同一の見解と気質から、同一の規定に基づいて、敵を擁護せず、キリストよりも父のことをより畏怖することなしに、父を憎み敵を愛することのできる者が、誰かあるだろうか」といった意味になるであろう。一方、原文のままのテキストに基づき、SCの意向に沿って訳すなら、上掲訳文の「より畏怖することなしに」

までは同一文で、それに続き「敵をすら愛しつつ、父を憎む者が誰かあるだろうか」といった意味となろう。シュテーリンは「憎む」と「愛する」について、これを *καὶ* で結ばれた一群の動詞と解したため、両者に同一の定動詞（希求法）形を要求して修正読みに至ったのに対し、写本ならびに SC は、おそらくこの *καὶ* を “also” の意味に取って「敵をすら」と解し、その結果 ἀγαπᾶν に関しては定動詞形を必要とせず分詞形で差し支えないと理解したのであろう。SC の解釈を多としたい。

49) 23,3,12

St ἀνάπαυσιν の後に *καὶ ἀπόλαυσιν* を加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、シュテーリン自身の提唱になるものである。写本のままのテキストに従うなら、「語られ得ずまた語り尽くせぬ諸々の善（に満ちた）休息」というふうに、「諸々の善」と「休息」とが、直接に結びつきやすい概念ではないため、何らかの語彙（「に満ちた」など）を補う必要がありそうである。そのためシュテーリンは、ここに「休息」を残したまま *καὶ ἀπόλαυσιν* 「～と享受」を付加し、「休息と、語られ得ずまた語り尽くせぬ諸々の善の享受」の意となるように修正を施した。しかしながら、「諸々の善」云々の部分は属格で表されていて、たとえば「～に満ちた」といった意はこの属格で十分に表現されうるものであろう。したがって、SC のテキストすなわち原文の措辞で、クレメンスの意図は十分に伝わると考えたい。

50) 25,4,16

St φθαρτικῶν S φθαρτῶν (= SC)

シュテーリンの読みは、メイヤーの見解（上記 10. 参照）に従ったもので、「破壊的な」という意の形容詞である。この形容詞は、後続の名詞 ὀνειροπολημάτων「幻影」を修飾する。写本のままであれば「腐敗した」という受動的な意味となり、悪しき影響を及ぼし働きかける幻影の能動性を明らかにするため、シュテーリンらはここに修正を施したのであろう。しかし「腐敗した幻影」で特に文脈と齟齬を来たすわけではない。SC の考えに賛意を表したい。

51) 26,2,7

St ἐνδεέστερον S ἀδεέστερον (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの読み（上記 7. 参照）に従ったものである。写本が形容詞 ἀδεής「恐れをもたらさない」の比較級形を読むのに対し、シュテーリンらは ἐνδεής「劣る・欠く」の同じく比較級形を読む。シュテーリ

ンらに従うなら「かの勧告に比して、何ら劣ることのない事柄が示されている」となるのに対し、写本のとおりに読むなら「かの勧告よりも、より恐れをもたらさないわけではない事柄が示されている」といった文意となるだろうか。物質的に財産を放棄せよ、とも解しうる福音書の勧告に比して、精神的に財産への執着を破棄せよ、という理解を提唱するクレメンスの勧めは、確かに「恐れをもたらし得る」勧告かも知れず、こちらの解釈を容れるなら、写本とSCの理解が成立することになる。

52) 26,2,16

St ναύταιςの後のτὸを削除する。 S (= SC)

シュテーリンの読みはシュテーリン自身の提唱になり、中性名詞 σύνθημα「合図・しるし」を修飾する定冠詞中性形を削除するというものである。「善き船長が、自らの船乗りたちに対し、どのような合図を授けるか」といった文意は変わらない。ただ「合図」が直接目的語になるため、通常は無冠詞で差し支えないとされるところであり、定冠詞を記す写本に、何か「定まったしるし・合図」という意味合いが含意されているのか、といった点まで読み込むかどうかである。そのような「定まったしるし」であれば定冠詞が必要となるが、特にその必要性は感じられない。

53) 26,3,18

St ἢ καὶの後にτὸを加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの読み（上記7. 参照）に従ったものである。シュテーリンらのように定冠詞の中性主格単数形τὸを補うなら、「あるいはむしろ、このような人間の考えもまた、非難の余地のないものではないだろうか」という文意の「考え」がくっきりと粹づけられることになる。ただ、ἀνέγκλητος「非難の余地のない」に関して明確な用例は見当たらないものの、ἐγκλητος「非難の余地ある」が派生した元来の動詞 ἐγκαλεῖν「非難する」については、通常は非難される対象（人）が与格で表されるとは言え、非難される事柄が属格で表現される用例も、稀ではあるが見出される（プルタルコス『アリストイデス伝』10）。この構文は、ἐγκαλεῖνの受動形容詞 ἐγκλητοςの否定形 ἀνέγκλητοςにも拡充して考えることができるかも知れない。するとこの場合、シュテーリンらが定冠詞τὸを付そうとした τοῦτουについて、シュテーリンらはこれを男性単数属格（つまり人）と解して「このような人間の」と解釈しているわけであるが、「このような考え（に対して）」と中性単数属格に読む可能性も残されており、もしそれが原文の文意であれば、写本のテキストもそのま

まの形で保持して差し支えないだろう、というのがSCの意図だと思われる。

54) 27,5,24

St αὐτῷ δὲ τῷ S αὐτὸ δὲ τὸ (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの提唱（上記7. 参照）に従ったものである。この句が属す一文の末尾に、κομίζεσθαι「獲得する」という動詞の現在中動相分詞・男性複数対格形 κομιζομένωνがあり、写本のままの読みであれば「自らの力と可能性に照らし、父を愛することそのこと自体を、不腐敗性として獲得する」といった文意となる。すると「父を愛すること」と「不腐敗性」とを同格に置き、ともに「獲得する」の直接目的語と理解することになる。それに対してシュテーリンらの読みは「父を愛することによって」と与格形に修正する提案であり、それによって「不腐敗性が獲得される」という理解がなされている。写本のテキストに基づくなら、「父を愛すること」自体が「不腐敗性」と等置されるわけで、クレメンス神学のうちに深い理解を読み込むテキストになっていると言えよう。シュテーリンらの提案のほうが一般的な解釈であり、写本に遺されたテキストのうちに、クレメンスのメッセージを読み取ろうとするSCの意向を多としたい。

55) 28,3,13

St παρῆλθεν S παρῆλθον (= SC)

シュテーリンの読みは、セガールの提唱した読み（上記2. 参照）に従ったものである。この一節では、いわゆる「善きサマリア人」の比喩（ルカ10,25-37）が背景にある。シュテーリンらのようにπαρῆλθεν（「彼は通り過ぎた」）と修正するなら、その主語は3人称単数となってこの「善きサマリア人」であり、「この人は、他の人々のようには偶然任せに通り過ぎることをせず」となる。だが写本通りの読みならば、このπαρῆλθονの主語は3人称複数であるから、文意は「この善きサマリア人は、他の人々が通り過ぎたようには偶然に任せることをせず、むしろ、この危難に遭った人が必要としていた事物を準備して到来し」となり、「善きサマリア人」の看護が、前もって予見したうえでの行為であったことをここに読み込むテキストとなる。写本テキストの措辞のうちに、これだけの神学を読み取りうるとすれば、これを修正しようとしないうるSCの意向は十分に理解できるだろう。

56) 29,4,14

St ψυχᾶςの後に οὗτος ὁ τὸ ἐλαιονを加える。 S (= SC)

シュテーリンの読みは、シュテーリン自身の提唱になるものである。写本の

まの読みであれば、「この方は、かの葡萄酒を、つまりダヴィデのブドウの樹の血を、われわれの傷ついた靈魂のために流し、父のはらわたからの憐れみを惜しみなく注ぐ」となる。一方、*ψυχᾶς*の後に *οὗτος ὁ τὸ ἐλαιον* を加えるなら、この一節は、第 29 章冒頭より引用が行われてきた「善きサマリア人」のたとえ話からの文脈を引き継いでいることになる。すなわち上掲の「流し」の部分で一度文章を区切る格好となり、続いて再び「この方は、父のはらわたからの憐れみを、かのオリーブ油として惜しみなく注ぐ」となる。さらにその次には「この方は」(*οὗτος ὁ*) という表現が原文でも 2 度現れるので、シュテーリンらの修正に従えば、「この方は」(*οὗτος ὁ*) という書き出しの節が 4 回繰り返されることになる。それに対し、原文のままのテキストであれば 3 回ということになる。そこでシュテーリンらは、すべての節にわたって「この方は」(*οὗτος ὁ*) を繰り返させ、かつ原文にはこの表現のなかった第 2 部分（「父のはらわたからの憐れみ…」）に、相応する同格付加句（「かのオリーブ油として」）を加えて整えた、というのが修正の意図である。ただこの箇所に関しても、原文のままで意味が取れないというわけではない。SC の基本方針が貫かれている一節である。

57) 31,5,16

St ἐκλίπη S ἐκλείπτε (= SC)

シュテーリンの読みは、シュテーリン自身の提唱になるものである。写本のテキストは *ἐκλίπτε* であり、動詞 *ἐκλείπειν*（他動詞で「見棄てる」・自動詞で「尽きる」）のアオリスト接続法能動相・2 人称複数形を呈しているのに対し、シュテーリンは、これを同一動詞のアオリスト接続法能動相・3 人称単数形に改めている。なおこの箇所は、『ルカ福音書』16,9 からの引用に当たり、『ルカ福音書』ではシュテーリンの提唱になる *ἐκλίπη* が通常の写本の読みである。また *ἐκλίπη* には、同じく *ἐκλείπειν* のアオリスト接続法中動相・2 人称単数形と解する方法もあり得るが、*ἐκλείπειν* に中動相での用例は伝えられていないので、能動相と理解しておく。福音書でこの動詞が単数形なのは、主語が *μαμωνᾶς* 「富」で単数形名詞であり、「金策が尽きたなら」という文意になるためである。福音書のテキストに基づくならシュテーリンの修正読みを採るべきところであるが、クレメンスがあくまでも自らの解釈の下に、この福音書の一節を理解していた可能性がある。クレメンスの許に伝わったテキストが異文であった可能性も否定できない。そのような場合、あくまでもクレメンスの写本を軸に考えるべきだというのが古典学の鉄則であり、SC はこちらに従ったものであろう。

ちなみに ἐκλείπειν は、「尽きる」という意味を人主語に適用して「生命尽き果てる」という意味にもなり得るわけで、「もしあなたの方が万策尽きたなら」と理解しうる。SCの深い理解を多としたい。

58) 31,8,29

St λύπησ after the καὶ to be deleted. S (= SC)

シュテーリンの読みは、セガールの提唱した読み（上記2. 参照）を容れたものである。καὶの後には κοινωνοῦντα という現在分詞・男性単数対格形がある（前文の「神は愛する」の直接目的語になっている）。写本のままのテキストであれば「与えることに喜びを見出し、蒔くことに惜しみなく、不平・論争・苦痛は一切なしに分ち合う」といった文意となるであろう。一方、もしシュテーリンのように λύπησ（「苦痛」）の後の καὶ を削除するのであれば、上掲の訳文の「惜しみなく」までは同文で、以下「不平・論争なしに、苦痛をも分かち合う」となるであろう。確かに「不平・論争」と「苦痛」とでその質が異なるという理解にも共感できるが、その場合の「苦痛」とは受苦の際の感情であって、その存在が前提とされている。写本テキストにあっては、すでに「苦痛」が浄化されて「分かち合い」の喜びのうちに昇華されている。その理解は美しいと言えるものであろう。SCの理解を多としたい。

59) 32,5,14

St σὺ 「あなたは」 S σὲ 「あなたを」 (= SC)

シュテーリンの読みは、メイヤーの見解（上記10. 参照）を容れたものである。彼らの修正に従うなら、文意は「命じられているのは、受け取ることでなく、あなた自身が提供することである」となるであろう。一方写本のままのテキストに従うなら、上掲の訳文の「受け取ることでなく」までは同文で、「あなた自身を提供することである」となる。「生命の限りを与え尽くすべし」とする福音書の教え（ヨハネ 12,25）を継ぐクレメンスの声を、ここに遺すべきだとまでは言わないが、写本に留められているメッセージを可能な限り残そうとするSCの方針については、これを多としたい。

60) 32,6,18

St οὔτε S οὐδὲ (= SC)

シュテーリンの読みはシュテーリン自身による提唱である。この一節は、οὐδὲ ... οὔτε ... οὔτε ..., ἀλλ' ... という構文から構成されていて、「信仰も、愛も、忍耐も、一日にして成るものではなく」といった文意を持つ。先頭の「信仰」だけが οὐδὲ に始まっており、これは後続の「愛」ないし「忍耐」と並列

されて然るべきである、というのがシュテーリンらの考えである。これに対してSCは写本のままのテキストを受け入れ、上述のようなシュテーリンらによる考えを知りつつも、これを「テキストの人為的改変」に当たると見なして、写本テキスト本文の保持を図るものである。

61) 33,3,13-14

St παρὰ θεῷ δυναμένων S παρὰ τῷ θεῷ δυναμένων (= SC)

シュテーリンの読みは、写本では「神」に付されている定冠詞を取り除くというものである。それ以前の部分から訳せば、「神の許で救うことのできる人々の」となるが、この一節の「人々」には元来定冠詞がある。シュテーリンの提案は、その「人々」の前の定冠詞とのダブリを防ぐ主旨のものと考えられるが、スペース以外の理由でテキストの改変を行うシュテーリンの主張に対し、その意図がいま一つはっきりしない。

62) 33,6,24

St κρυπτός ... ὁ πατήρ S ὁ κρυπτός ... πατήρ (= SC)

写本では「隠れた方である父は内在し」となっているのに対して、シュテーリンの読みは「父は隠れた姿で内在し」といったニュアンスであろうか。文脈上大きな差異が生じるわけではないが、ここにも、誤りでない限り必要以上に原写本を改変しないというSCの基本理念が貫かれている。

63) 34,3,20

St ἐλεγχομένη. ἐνεργοὶ S ἐλεγχομένη ἐν ἔργοις (= SC)

写本は「この力は業において検証され」と取れるのに対して、シュテーリンはἐνεργοὶを一語に読んで「働きをなす」を意味する形容詞と取り、次節の先頭に移す。次の64と関連するため、次項において説明を施す。

64) 35,1,1

St οἱを削除 S οἱ (= SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツの提唱を容れたものである。定冠詞を付した写本の理解では、「これらの兵士たち・守り手たちは、すべて頑強な者たちである」となる一方、シュテーリンらに従うなら、前項にあったようにこの文の冒頭にἐνεργοὶが加わるため、「これらの兵士たちはすべてよく働きをなし、守り手たちは頑強である」となる。前者に不自然さは感じられず、SCの見解を多としたい。

65) 36,3,13

St ὁ S οὗ (= SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツの提唱を容れたものである。S写本では、οὐの前に前置詞διὰがあり(δι'), 関係詞οὐの先行詞は直前の「父」であるから、「父によって」という意となり、不自然さは感じられない。シュテーリンらの読みでは、関係詞ὁの先行詞はσπέρμα「種子」となり「この種子を通して」といった意味になる。SCの理解を採りたい。

66) 36,3,17

St πάντα「すべて」 S ταῦτα「それら」(=SC)

シュテーリンの読みは、シュヴァルツの提唱する読みを容れたものである。こちらに従うなら「すべては速やかに解体する」であるのに対して、写本のテキストをそのまま受け入れるSCに従うなら「それらは速やかに解体する」となる。シュテーリンらのように強調の意を取えてここに読み込まなくても差し支えないように思われる。

67) 37,2,4

St ἐθεάθη「見られる」 S ἐθηράθη「追い求められる」(=SC)

シュテーリンは、リンドナーの提唱した読み(上記1. 参照)に従い、写本のἐθηράθη「追い求められた」を修正してἐθεάθη「見られた」を読んでいる。このリンドナーおよびシュテーリンの読みを採るならば「神は愛であり、愛を通じてわれわれに見られる」となって、『ヨハネ福音書』に固有な「愛の神学」(ヨハネ 13,34; 15,12; 15,17; 1ヨハネ 3,11; 4,8; 4,16)がここに顕著となる。この読みの提唱については、SCの編者自ら「才覚に満ち溢れる」(ingénieuse)と讃辞を惜しまない。またクレメンス自身、『ストロマテイス』5,3,16,5において、「ロゴスは進み出て創造をおこない、さらには自らをも生むものとなる。それはロゴスが目にも見えるものとなるべく肉体となったときである(ヨハネ 1,14)」と述べ、ロゴスが受肉によって、感覚にも見えるものとなったことを強調している。ただそのSCも、写本の「神は愛であり、愛を通じてわれわれに追い求められる」という文脈は保持されることが望ましい、としている。

68) 38,5,19

St μηδὲ S μήτε(=SC)

シュテーリンの読みは、1868年オクスフォードから公刊されたヴィルヘルム・ディンドルフによる版本での提唱を受け入れたものである。写本に載るμήτεという語彙は、ふつう繰り返されて(μήτε... μήτε...)否定を強調する。しかしこの箇所では、反復される否定要素が見当たらない、というのが修正の

理由であろう。もっともこの程度のブレであれば、クレメンスの措辞用法からは逸脱しない、というのがSCの主張であろうか。

69) 39,1,3

St αἰωνίων S αἰώνων τῶν (= SC)

シュテーリンの読みは、ギスリエリの提唱（上記7. 参照）に従ったもので、「永遠なる善き事ども」というふうに、「永遠の」と形容詞に読む提案である。写本は「善き永遠性」と「永遠（性）」を名詞に読む。ここでも、写本のテキストを活かしうる限り最大限に活かそうとするSCの方針が顕著である。

70) 39,1,7

St <ὅτι> SC <οὐδέ>

写本テキストではいずれにしても何か語彙が不足しており、語を補う必要がある。シュテーリンは接続詞ὅτιを補うのに対し、メイヤーとヴィラモヴィッツはοὐδέと補っており、SCはこちらを採っている。メイヤーの見解は、1898年に公表されたものである（上記10. 参照）。メイヤーとヴィラモヴィッツ、そしてSCの読みに従えば、ここに否定を1回読み込むことになり、「この人間が神によって断罪されるわけではまったくもってない」となる。こちらの解釈に不十分な点は認められない。

結.

本文中にたびたび書き記したことであるが、SCの文面からは、必要以上に原写本のテキストに手を加えることを控え、可能な限り最古の写本に伝承される文面を遺したうえで、そこに原著者クレメンスの生の声を聞き届け、その神学を汲み取ろうとする、強い意志と編纂方針を明確に感じ取ることができる。初期ギリシア教父の小品ではあるが、古典文献学的な側面から、テキストの異なる細かな問題を論じる機会が与えられたことを感謝したい。

【参考文献】

- C. Nardi, P. Descourtieux (introduction, notes et index), P. Descourtieux (traduction), *Clément d'Alexandrie: Quel riche sera sauvé?* (Sources Chrétiennes no. 537), Paris 2011.
- O. Stählin (ed.), *Clemens Alexandrinus Bd.III: Stromata VII und VIII, Excerpta ex Theodoto, Eclogae Propheticae, Quis Dives Salvetur, Fragmente*, Die Griechischen Christlichen Schriftsteller 17, Leipzig 1909; L. Früchtel (rééd.), Berlin 21980.

- 秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス『救われる富者とは誰であるか』全訳【改訂版】」筑波大学大学院人文社会科学研究所人文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究文藝篇』67, 51-87, 2015 (<http://hdl.handle.net/2241/00124338>).
- 秋山 学 (訳注), 「アレクサンドレイアのクレメンス『救われる富者は誰か』」上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』417-466, 平凡社, 1995.
- K. Holl, *Fragmente vornicänischer Kirchenväter aus den Sacra Parallela*, TU 20/2, Leipzig 1899 (https://archive.org/details/bub_gb_FA1ZAAAAYAAJ/page/n153).